連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「桂庵玄樹 ～朱子学を究めた、薩南学派の祖～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2025年6月27日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

桂庵玄樹

薩摩半島の南東端に、港町として栄えた山川（鹿児島県指宿市）があります。ここは、向かい合う大隅半島の根占（南大隅町）と共に、錦江湾（鹿児島湾）の入り口に位置する重要な港でした。

永禄4（1561）年付のインド副王ドン・フランシスコ・コウティーニョ宛て島津貴久書状写には、ポルトガル商人の船が山川に入港したことが記されています。また、元和9（1623）年には、スペイン国王使節のドン・フェルナンド・デ・アヤラとドン・アントニオが、「山河」（山川）の港に上陸し、江戸幕府（将軍徳川家光）との外交交渉への援助を薩摩藩老中に依頼した事実も判明しています。地理的に近い中国や琉球のみならず、ヨーロッパとの関係においても外交の最前線として機能する国際港だったといえます。

この山川で特筆されるのは、明治期の廃仏毀釈で廃寺となった臨済宗寺院正龍寺の存在です。六十数基の石造物が正龍寺跡墓石群として残されています。古いものとして、天文21（1552）年の板碑、永禄9（66）年の宝珠付角柱石塔婆が見られ、往時の繁栄がうかがえます。中世から近世初頭の当寺の僧は、山川で交わされる外交文書の起草に携わるとともに、薩南学派の学問寺のひとつとして機能しました。

朱子学を究めた、薩南学派の祖

正龍寺跡墓石群（鹿児島県指宿市山川）

この学派を開いたのが桂庵玄樹です。大友氏下の豊後万寿寺、大内氏下の長門永福寺の住持を務めています。その後、応仁度の遣明船に雪舟等楊らと共に乗り込んで、応仁元（1467）年に明に渡り、蘇州などで7年間遊学して朱子学を究めました。帰国後、薩摩の島津忠昌や忠廉に招かれて朱子学を講じ、薩南学派の祖として名を成したのです。この寺には、江戸初期の儒学者藤原惺窩も訪れ、桂庵玄樹らの学問の軌跡に学んでいます。

寺院に隣接する地には、かつて唐人町があり、その辺りが中世から明治期にかけての山川の中心でした。近世には、琉球貿易や奄美諸島の砂糖交易に関連する蔵が立ち並んでいました。さらに、そのコスモポリタン性（国際性）は、現在も路地の各所に散在する石敢當が物語ります。丁字路や三差路の突き当たりに置く魔よけの石碑、石標として、同様の文化を有する中国福建省南部や琉球との習俗文化的つながりを証しています。

桂庵玄樹は、豊後万寿寺や薩摩正龍寺という15世紀後半期の対明交流の活発な地の寺院を拠点として、自らの儒学思想を究めていったのです。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

＝月1回掲載＝